

経済・金融 フラッシュ

09年1-3月期資金循環統計:

個人金融資産は6四半期連続の前年比マイナス、
2年間で約1割が消失

経済調査部門 副主任研究員 上野 剛志

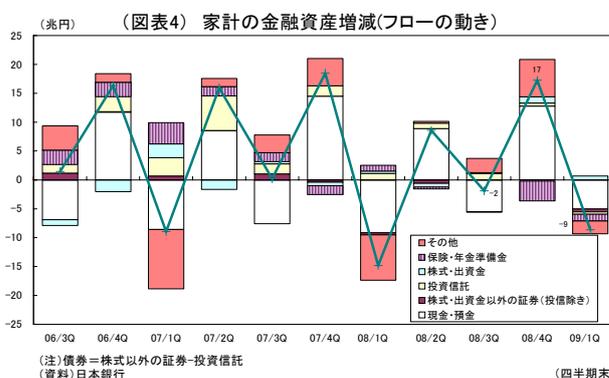
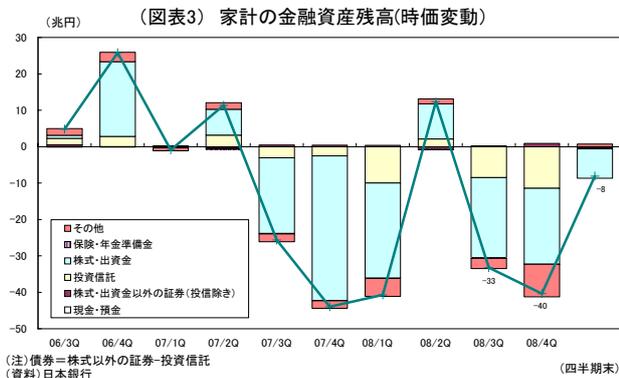
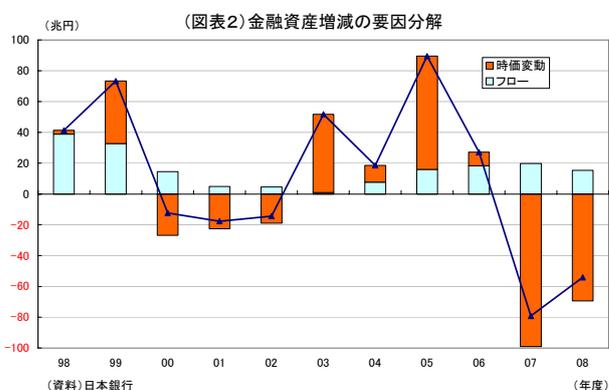
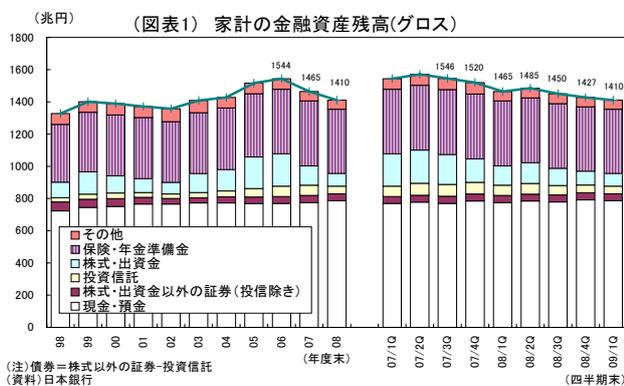
TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

1. 個人金融資産残高(08年度末、09年1-3月期末): 2年間で約1割が消失

08年度末の個人金融資産残高は1410兆円と、07年度末から54兆円の減少となった。残高の減少は2年連続となり、減少幅は1980年の統計開始以来最大であった07年度(79兆円)に次ぐ水準を記録。2年累計で133兆円の減少と、ピークであった06年度末(1544兆円)の約1割がこの2年で消失したことになる。また、四半期では金額ベースで3期連続、前年比で6期連続のマイナスが続いている(図表1)。

なお、54兆円の年度残高減少をフロー(流出入額)と時価変動に分解した場合、フローはプラス15兆円と流入超であったのに対し、株式を中心に時価変動のマイナスが69兆円に達しており、金融危機に伴う株価下落が家計に与えた多大な負の影響が現れている(図表2~4)。

3月以降は株価が回復していることから、4-6月期は時価の増加が個人金融資産の増加に寄与することが見込まれるが、一方で家計の所得減少に伴うフローの減少が見込まれることから、金融資産残高の増減はこのうちのどちらの要因が強く出るかにかかっている。



2. フロー(時価変動を除いた流出入額)の動き: リスク回避の流れが継続

四半期ベースでフローの内訳を見るにあたり、季節要因を除くため、直近4四半期累計というやや長めの基調を捉えた動きをみると、03年度を底に金融資産への資金流入が続いており、足元の状況も流入超過となっている。

内訳を見ると、07年度以降、株安・円高を背景に投資信託への資金流入が大幅に減速、頭打ちになる一方で、現金・預金、特に定期性預金の増加が顕著であり、月次のマネーストック統計の動きと同様、リスク資産から安全資産への資金移動が続いているようだ。(図表5~8)

